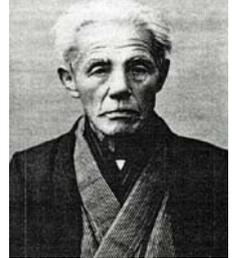


10-3 松本城クイズ39 松原葆斎・浅井冽について(解答・解説)

松本城管理事務所研究室

1、松原家は代々口口をもって藩主に仕(つか)えていた。衢(ちまた:葆斎のこと)の父素庵有恒も父祖の業を継いで、小納戸格で禄を貰っていた。口口に入る言葉を次の中から一つ選びなさい。.....②



松原家は松平家(戸田家)が美濃加納在城からの家臣であり、代々医業をもって仕えていた。衢(ちまた:葆斎のこと)の父素庵有恒も父祖の業を継いで、小納戸格で俸禄を貰っていた。三の丸土居尻町に屋敷を構えていた。

2、葆斎も代々の家業を継ぐべく江戸に出て学問を学んだ。弘化4年(1847)藩主光庸(みつつね)に従って京都に行き、岡本甲斐守に就いて学んだ。また遠く口口に出向き家業を継ぐべき学問の習得に励んだ。帰藩してからは命を受けて仕えた。どこまで出向いたのか、次の中から一つ選びなさい。.....④



弘化4年(1847)藩主戸田光庸に従って京都に出向き、典薬頭岡本甲斐守について医業を学ぶ。また長崎に出向いて医学を修め兼ねて海外の事情を研究し、嘉永3年(1850)の冬に帰藩してから命を受けて医業をもって仕えた。また儒官を兼ねた。時に26歳であった。その時著したものが「長崎紀行」で左の写真のように冊子となっている。

3、文久2年(1862)37歳の時再び江戸に行き、昌平黉(しょうへいこう:昌平坂学問所)で学んだ。考えるところあり、ひとの心を直す方がよいと身を立てる決心をした。さて、次のどの道で身を立てる決心をしたのか、一つ選びなさい。.....③

37歳の時再び江戸に行き、昌平黉で専ら儒学を究め、傍ら医学をも修め、天下の秀才とも交わり学問と徳行に励んだ。人の病気を治すよりも人の心を直す方がよいと考えるに至り、医業を弟の衆甫(しゅうほ)に譲り、儒学を以て将来身を立てることを決心した。

4、昌平黉の経義係などを経て、明治3年(1870)昌平黉を改めて大学になるのにより、大学中助教として勤務した。.....開智学校が創立されるとそこに勤務した。.....53歳で北安曇郡池田小学校に勤務、11年には長野県師範学校松本支校兼十八番中学校教諭となって漢文の教授を受持った。同年口口を開いて、門弟を集めて漢学を教授した。葆斎の学徳を慕って県下から門弟が集結したという。口口に当てはまる言葉を、次の中から一つ選びなさい。.....①

家塾(私塾)を開いて校務の余暇に朝夕門弟を集めて漢学を教授した。慕って来る者南信各郡のみでなく、北信地方までに及んだという。

5、葆斎の残した書籍は数千巻あったが、子の栄(さこう)が全てを松本図書館に寄贈して、父の志を為した。その中でも注目されるものとして、右の写真にある書物である。この書物は何と呼ばれているか、次の中から一つ選びなさい。.....④

松本図書館では寄贈書を「松原文庫」として大切に保存している。なかでも注目される書として国の重要文化財として世界に三点しかない「宋版漢書」慶元刊本 120巻がある。極めて貴重な書である。明治39年11月に他の和漢書と一緒に開智図書館(松本図書館んの前身)へ寄贈となった。



6、浅井洌は、嘉永2年（1849）10月、信濃国筑摩郡北深志に生まれた。松本藩士大岩昌言（まさのり）の第4子で三男として誕生した。後浅井家に養子に入る。どこの町で誕生したか、次の中から一つ選びなさい。・・・①

嘉永2年10月10日、筑摩郡北深志の鷹匠町に、松本藩士大岩昌言の第4子で三男として誕生した。長男である昌蔵と洌との間には、一女一男があったが早世している。5人誕生したが、兄昌蔵、弟昌成（小川家へ養子）の3人が残った。12才の時堂町浅井持満（もちみつ）家の養嫡子となった。



7、洌の8歳から15歳頃は、松本藩士の子弟として、また藩士としてかかすことの出来ない武芸および漢学の習得時代といえる。この頃多くの師から武芸や学問を学んだ。次の中の人物の中で師として学ばなかった人を一人選びなさい。・・・・・・④

父昌言からは四書の素読を、豊島利恭には五経を、柴田利直には四書小学、春秋左氏伝、前後漢書を学んだ。また多湖安貞にも四書小学、春秋左氏伝、前後漢書を、菅沼富次郎には槍術を学んだ。そのほか安東七郎左衛門、吉江右衛門太郎、上田繁左衛門、黒田十兵衛、中島這棄（このすて）らにも剣術・砲術・泳術（えいしゅう）・喇叭等を学んだ。木下尚江は洌が師である。

8、後に崇教館（そうきょうかん）で算術や詩経・書経・史記などを学ぶ。さらに師範講習所で学び、卒業して訓導となる。24歳ころから37歳頃までは、開智学校や松本中学校に勤務して国語・漢文・歴史等を教えた。この頃新進気鋭（しんしんきえい）の青年教師の多くは、□□に参加していたが、洌も例外ではなく、結社の重要ポストとなり役割を果たしていた。次の中から参加していた運動の一つを選びなさい。・・・・・・②

明治12年（1879）には教師をしながら北深志町町会議員をつとめ、教育会でも長野県教育会議の議員や東筑摩教育会の議員として活躍している。このころ自由民権運動を組織的におし進めている時にあたり、彼もその一人となり、明治11年から13年頃にかけて演説をしている。明治12年に松本に民権政社の猶興社が組織されたがその創立委員となり、翌年奨匡社へと発展、この時は常備議員となり、国会開設願望書の起草委員として、松沢求策と共に重要な役割を果たしている。

9、38歳から78歳までは長野県尋常師範学校に勤務を命ぜられて、国語・漢分・歴史・習字などを担当した。明治32年（1899）6月信濃教育会雑誌153号に、長野県小学校唱歌「信濃の国」を発表する。作曲は同校教諭依田弁之助であった。しかし、雅楽調でリズムが緩やかであったためあまり歌われなかった。明治32年赴任してきた音楽教師が新に作曲する。テンポが速く軽快なリズムであったため歌いやすかった。師範の生徒から各地の小学校に広められ、歌詞も訂正を重ねたものが今県歌として歌われている「信濃の国」である。2回目の作曲者は、次の内誰か一つ選びなさい。・・・・・・①

信濃教育会の委嘱により作詞する。明治32年（1899）6月「信濃教育会雑誌」に発表する。北村季晴の作曲したものが、校歌のなかった長野師範学校で愛唱され、卒業生により広く県下に広まっていった。



北村 季晴

10、「信濃の国」作詞の前後の洌は、多くの学校等の校歌等の作詞を手がけた。何校くらい（郡歌・村歌・団歌等含めて）作詞したか、次の中から一つ選びなさい。・・・・・・④

66校の作詞をした。現在でも歌われている学校は28校を数える。松本周辺校では、開智小・塩尻東、西小・新村小（芝沢小）・梓川高校・長野刑務所松本支所歌・今井青年団歌などを作詩した。